京三中『十八会』の現況について

三中34回　村山圭一

三中第34回生は昭和十三年四月に入学、満州事変、皇紀二六〇〇年記念を経て、在校中の四年生の十二月八日に太平洋戦争が勃発し、文字通りの戦時体制となり、入学当初は長ズボンに下駄履きで、通学していたのが、急遽、編上げ靴にゲートル巻きで隊列を組んでの通学となった。軍事教練や勤労奉仕は盛んになり、学徒動員が始まる前後の昭和十八年三月に卒業したので、青春を謳歌するどころでは無く、それだけに、勉学に力が入り当時を振

り返っても、優秀な先生方に恵まれ、休憩時間にも友達と判らない問題の解答を教え合い良く頑張って勉強したと、お互いが自認している程であります。

私達の学年が同窓の会を始めたのは、もはや戦後ではないと謂われ出した昭和三二年頃で、昭和十八年卒業なので「十八会」と名付け、物故者の慰霊同窓会も数回行い、病気の学友の情報を流して見舞う等、地味ではあるが有意義な同窓の会でありました。

現在の『十八会』は年に一度の集まりであるが、毎年集まる毎に二十数人の体調不良による欠席者があり、老齢化を感じるようになってきました。しかし、会員の提案で「出てこられなくても文章位は書けるだろう、遠方に元気でいる会員は尚更だ」と現在の気持ちや皆に伝えたい文章の投稿を募り、それを文集にして全員に配布して、交流を図る試みを一昨年から始め、先日文集第二号を配布し終わったところです。又、他の会員の提案で、年に一度では機会がたりないと親しい者同志で、年に数回寄り合って大いに団欒しようではないかと「小集会」の実施も始まります。

中学時代の会合は進んだ道がまちまちの者の集まりであり、しかも我々の場合、時代の趨勢に翻弄されても我が道を貫徹した者や心ならずも選んだ道で、尚且つ立派に生き抜いて来た猛者の集まりとなれば、話が尽きないのは当然であります。今、

振り返ればあの日露戦争が我々が生まれる二十年前のことであり、明治維新から生まれるまでよりも生まれて来てから現在までの方が長いのであるから、よくも長生きしたものだと感じる今日この頃であります。

青春時代の物資不足の苦しかった時代や戦後の復興に奮闘して来た時代を経て、復興成り、物資の豊富になった今、親しかった学友と楽しかった思い出を語り合い、母校の創立百年を祝うのは、「また楽しからずや」であります。